

193
154

程留十年圖

提唱十牛圖

宗演禪師



侍者 某筆記

近年になりて、禪學と云ふことは、餘程世間に持離さるゝやうになり
 たれど、何れも盲者の墻のぞき同様にて、一向取留めたこともない、禪
 學は原來人生の一大事因縁にして、中々容易の看をなすべきものに
 あらざるは、世間の人は或は之を碁を圍みたり、骨牌を弄したり、茶の
 湯をたてたり、することゝ同じ様に心得て、一の流行物、翫弄物となさ
 れば、あるに至りては、以ての外の心得違ひぢや、かくの如き
 考へにて、禪學をなすものは、佛教の神聖を犯すのみならず、自己本來
 の面目をも、併せて滅却する人と云はねばならん、故に禪學の事を説
 く前に、先づ是等の人々を警戒して、決して左様な心得違ひなき様に、

してをかねはなるまいと思ふ、
抑も大道と曰ふものは、廓然として聖凡の區別もなければ、迷悟の沙汰もないものぢや、禪學と云ふ、閑名字を安んずるも、既に多少の敗闕をまぬかれぬ、さらば禪學を世間の浮氣な人々の様に、文字言句の裡に、尋ね當てんとしたとて、猶ほ海上の唇氣樓を逐ふが如く、愈々求むれば、愈々遠くなり行くはかり、到底了期あるものでない、若し文字言句で禪學がわかるものなら、達磨大師は支那に於ける、傳道の第一着として、五千四十餘卷の經文の解釋でも始めたるならん、惠可大師は一夜を雪中に立あかすが如き、愚をなさずして、燈下に古經を繙きしならん、人々具有個々圓成底の大事を外にして、あの語録をながめたり、この經典をひろげたりしたとて、句に滯り言に迷ふ、はた何の益あるべきぞ、たゞ三界に輪廻し、四生に出沒する因を作るばかり、甚だ憫むべきことである、

これと云ふも、安心立命の何たるかを知らず、茫々蕩々として、一塊の死肉の如く、日をわたるからじや、人間も朝から晩迄、食つたり飲んだり寝たり起きたり、只禽獸の如くに暮すべきものなら、いざ知らず、荷も多少の考を有し、多少の望を有するからにや、何か立脚の地を定めねばならぬ、大盤石の上に立つか如き、信仰の土臺をもつて居らねばならぬ、この土臺の處に氣がつかぬから、輕薄な考も浮び、間に合はせの智慧も出づる様になり、禪學も一種の慰みものとなり了る、もし眞面目な心得がありたらんには、決定してそんなつまらぬ考へはをこらぬはづぢや、達磨大師も、豈に小徳小智、輕心慢心を以て眞乘を冀はんやと言はれた、試に夜更け人定まりたる時、孤燈明滅の下に在りて、其身の運命を思ひはかれ、吾は何れの處より生れ來りて、何れの處に死し去るべき者か、人生五十の間、或は喜び或は悲み、或は怒り或は笑ふ、是れ何の所爲ぞ、人はたゞ飯袋子となりて、此世を過さば、それにて

足るものか、まづ是等の問題を把りて、汝の胸間に掛在せよ、眞面目の一念子だに未だ混ひずば、静慮一番の後、汝は必ず一種の煩悶によりて苦みを感じるならん、この煩悶を感じる處は、即ち宗教の生命の在る處にして、禪を修むるの土臺となるなり、是の如き人に向つて、始めて文字言句以外の事を談ずるに足るべきか、倪天は諸君も知れる如く、世に聞け高き大詩人なり、試みに彼がフアウストを把りて一讀せよ、如何に彼が煩悶したるか、明かに知り得らるゝならん、蓋し文字言句の末にのみ縛せられて、一生他人の奴隸となり了るものには、此れらの事を語るも雙の如く啞の如くなるべきか、それでも佛祖の慈悲は有りがたきものぢや、かくまで迷へる衆生は、憐れだと思召して、色々の方便を設けて、之を濟度せんとせらるゝ、今講せんとする十牛の圖の如きも、古人が衆生の根器を觀て、其病に應じて、施こされたる方便ぢや、若しそれ正眼に看來れば、皆是開言長語、平地に波瀾を

起すと同じ事、されど眞向にさう言はれては、迷ふもの愈、迷はんも知れず、そこで叮嚀にも老婆禪を打する様なわけぢや、十牛圖の作者は、誰れか定かに知れてをらんのである、會元に依るときは、廓庵禪師(大隨靜禪師の法嗣)が此圖と頌どを作りたるやうなれども、四部録などにある、十牛圖序を見るときは、清居禪師(傳未詳)と云ふ人の作のやうにも見ゆる、併し又或人の説によれば、清居禪師の十牛圖は今のと違ひて、牛の彩色の工合によりて、進歩の次第を示されたるものなるに、廓庵禪師は之を修正して、今時行はるゝもの、様にせられたるなり、と云へり、されどこんな事は、何れにしてもかまわぬ、古人のうち誰れか、後人のためにとて書き残されたものなる故吾等は有りがたく拜讀すれば、それで澤山ぢや、心事修練の位を、牧牛の事に譬うるは、由來のあることぢや、阿含經の中には、牧牛の十二法を説き、大論には十一事を明らかに明らめてある、又支那

六
に入りて、吾禪門の諸祖が水牯牛の公案を、擧揚せられたともある、即ち石鞏慧藏禪師(唐代の人、馬祖道一禪師の法嗣)一日厨に在りて作務す、馬祖曰く什麼をか作す、曰く牛を牧す、馬祖曰く作麼生か牧す、曰く一回草に入り去れば、鷄鼻に曳き將ち回る、祖曰く子は眞の牧牛なりと、又南泉普願禪師(唐朝馬祖道一禪師の法嗣)の上堂に曰く、王老師(自ら言ふ)小より一頭の水牯牛を養ふ、溪東に向つて牧せんと擬せば、他の國王の水草を食ふを免かれず、溪西に向つて牧せんと擬せば、彼の國王の水草を食ふを免かれず、如かず分に随つて些些を納れて、総に見得せざらんにはと、又瀉山靈祐禪師(唐朝百丈懷海禪師の法嗣)上堂に曰く、老僧百年の後、山下の向つて一頭の水牯牛とならん、左脇に五字を書す、曰く瀉山僧某甲と、恁麼の時喚んで瀉山僧と作さは、又是水牯牛、喚んで水牯牛と作さは、又是瀉山僧、畢竟喚んで甚麼と作してか、即ち得てんと、此の如く牛に譬へて、心事を説くことは、古より之れ

あつたのである、

尋牛序一

從來不失、何用追尋、由背覺以成疎、在向塵而遂失、家山漸遠、岐路俄差、得失熾然、是非鋒起、

正眼に看來れば、眞如の月を具足せぬものはない、元來取り失ふたど云ふことは、ないのであるから、今更やんやと騒ぎ立ちて、闇の夜を燈なしに、尋ねまわりたりとて、只骨折損のくたびれ儲けぢや、自分は本來立派な露地の白牛に騎してゐながら、何處に在るであらふかと、狼狽あるくは馬鹿の骨頂ではないか、されど悲しいとは、衆生の迷悶によりて、覺に背きて塵の中に交はり、己靈の光輝を味まして、向ふばかりを見てをるが故に、原より親しかりしものも、遂には離れて疎くなるやうになつた、五欲六塵の中に向つて、朝から晩まで奔走したる

報は、靚面人々具有底の一頭の水牯牛を、失却するやうになつた、愈、こ
うなると、其牛を見出して、本の通りにする事が、中々六ヶしい、家山
漸く遠しで、自分の故郷でありし所も、今は十万億土と云はず、千万億
土と云はず、とちらへ行て、牛を尋ねやうやら、岐路が縦にも横にも、錯
り合ふてをるもの故、あれが得ぢや、これが失ぢやと、是非善惡の辨が、
鋒の如くに起りくるぢや、かくして種々の安排をなすものゆゑ、途方
にくれる外はない、本來の水牯牛を求め得んとならば、たゞ自己の脚
跟下を看よ、山芋を掘るには、まづ其蔓よりすると云ふが、まづ汝が見
聞覺知の主人公は、誰れぢやと尋ねるがよい、

頌曰、

廓庵遠和尚

茫茫撥草去、追尋水澗、山遙路更深、力盡神疲、無處覓、但聞楓樹晚
蟬吟、

頌と云ふは、梵語の伽陀を漢譯したるにて、佛經の中には澤山あるも

のぢや、詩には相違なけれども、其中に宗旨を含ませてある故、世俗の
詩と區別して、別に頌とは云ふぞ、禪門には多くこの頌なるものを用
ゆるが故に、佛教文學と云ふ中にも、一種の異彩を放つてをる、廓庵和
尚と云ふは、支那の常德府梁山に住せられた人で、此頌の作者である、
次に石鼓夷和尚、及壞納理和尚と云ふがありて、此頌の韻に和して、又
一首つゝを作られた、そは下に述ぶる處を見れば明ならん、さて頌の意
味は如何と云ふに、かの牛を失ひたる人が、之を求めんとて、あちこち
をさまよう様子を述べたのである、元來失はぬのぢやから、尋ねれば
尋ねるほど、迷ふには相違なけれども、それぢやとて、又尋ねぬわけにも
いかないのである、そこでいさ尋ねんとすれば、見渡すかぎり茫茫たる
草原にて、何れに求めんやうもなし、檜原松原かきわけて、あの山こゑ
つ、この山こゑつ、妄想煩惱の草蔓を、打拂ひ、進み行けども、人我の
山高く、愛河の水深くして、路愈遙なるこそうたてけれ、一念動けば忽

にして千里萬里と云ふが、既に妄想を拂ふとすれば、即ち一念の動き
出せるのちや、山を越ぬ水を涉りて、深きより深きに迷ふも勿論であ
る、かくどこを尋ねても、牛の跡だに見えず、いつはてしあると云ふこ
となき故、力も盡き神も疲れて、只落涙痛哭するはかりじや、左右前後
大地黒漫々で、何と手の着けやうもない、それで如何なる英雄豪傑も、
是に至りては技倆の施すべきなく、智才の用ゆべきないので、二祖は
臂を断ち、慈明は錐を股に刺すやうになりた、其時の心の様を喩へて
見れば、夏山の繁みに、暮れ方に迷ひ込んだ様なもので、妄想は蟬の鳴
くよりも烈しく、千錯万錯何としたり好からうぞ

和

只管區區向外尋、不知脚底已泥深。幾回芳草斜陽裏、一曲新豐空
自吟。

これは石鼓夷禪師(天童無用全禪師法嗣)が前の頌に和して、作られた

じや、自ら内に省みることを忘れて、ひたすら外に向つて、即ち文字言
句につきまわされて、こゝかそこかど尋ねあるく、自らはれ牛なるこ
とに、氣がつかぬものじやから、あつちれつちと世話をやいて、他に牛
を尋ねてをる、さうして自己の脚下は泥深きこと三尺で、尋ねるはど
足が動かなくなる、進まんに進まれず、退かんに退かれず、彼れこ
れするうちに、日は西に傾きて、又闇の夜となりたること、幾回なりし
ぞ、芳草の萎々たる處にこそ、牛は眠り居るならめと思ひて、そこらあ
たりを、めつたやたらに、空しく歌ひまわつた、何と歌ふたか、趙州曰無
と、めつたに歌ふた、されど牛は中々容易に見當らんのじや、新豐の曲
とは、如何なる曲調にや、分明ならねど、百姓爺が豊年を祝はんだめの、
俗語なりとせば可なるべし、

又

本無蹤跡是誰尋、誤入煙蘿深處深。手把鼻頭同歸客、水邊林下自

沈吟

裏納理和尚は、雲居の蓬庵會禪師の法嗣じや、さて本頌の意義は、本來
 この牛は、形もなく相もない、よつて何にもないかど云ふに、そうでも
 ない、盡十方法界にすさまもなく、充ち塞つてをる、全体一体じや、そう
 してこれど云ふて、捕りたさゆへさ跡方のないのであるから、誰れが
 何處を尋ねても、得べきやうはない、昔し二祖惠可大師が、達磨大師に
 參禪して、どふか安心さして下さいと曰たら、達磨さんの曰はれるに
 は、安心さして呉れど云ふ、其心を將て來い、そうすりや安心させてや
 らふど、そこで二祖は心を求むるに、不可得なりと曰はれたら、達磨さ
 んは、汝の爲に安心し了れりと答へられた、實に此牛はいくら尋ねて
 も、得られる者でないのじや、それに初め牛をいかんと思つて、尋ねだ
 したから、誤りに誤りを重ねて、葛藤窟裡に落在するやふな、始末とな
 った、深きより愈、深きに迷ひ込では、何の時にか求め得べきじや、東坡

の詩に不識廬山真面目、只緣身在此山中と云ふのが、一たび身
 を翻へし來れば、元來牛是れ我、我是れ牛、牛と我と同じく、乾坤唯一枚
 の水牯牛じや、百姓は日々に牛の鼻づらを把りて、使ひまわして居る
 なれど、自から識らぬのが、可笑いではないか、誰もく行かんと要せ
 は則ち行き、坐せんと要せば則ち坐す、何の不足もないじや、それを知
 らぬからして、水の邊りにぶらついたり、林の中にうろついたりして、
 牛を探がし當てやうとする、空しく自ら沈吟するのみで、所詮甲斐は
 ないのじや、そんなら始めから、探さぬが好いかと云ふに、決してさふ
 ではない、儒者も之を誠にするのが、人の道じやと曰ふ如く、元來至誠
 は天地の大道理であると云たとして、この身このまゝでは、いけんので
 ある、必ず之を誠にせねはならん、それじやから、釋尊も骨を折られた、
 仇やれるかでは決して、いけるものでない、ゆめく容易の看をする
 な、三首の頌の中で、此頌が一番好いと云ふことじや、さて通常我國に

行はるゝ十牛圖には、圖毎に國詩を二首ヅ、添えてある、平易に本願の意味を述べたるものにて、婦女子にもわかりよくなつてをる、實に古人は親切なものである、種々の手段によりて、人を濟度せやうと務めらるゝは、如何にも有りがたきことぢや、其歌二つ、此に掲ぐ



尋ね行くみやまの牛は見ぬすして只空蟬の聲のみぞする
尋ねいる牛こそ見ぬね夏山の梢に蟬の聲ばかりして

見跡序二

依經解義、閱教知蹤、明衆器爲一、金體萬物爲自己、正邪不辨、眞僞奚分、未入斯門、權爲見跡、

本來失つたことのない水枯牛を、尋ねくたる甲斐ありたか、漸く跡を見つけたと曰ふ、ことが第二位じや、經を讀みたり教を閱みしたりして、稍義理を解し、牛の足跡は、かうでもあらふかど、まだ埒のあかぬ悟じや、大菩提と云ふものがあるか、自己の本心と云ふは、このやうなものかど、まづ鑄形を認め得たのしや、衆器の一金たるを明にすとは、楞伽三に、譬へは金變じて諸器物となれば、則ち種種の形處顯現するあるが如し、金性變するにあらず、一切の性變も亦復此の如し、と説

十六
き又唐の裴相國の禪源諸詮序に、餅盤銀劍を融して鑄すれば、一金となり、酥酪醍醐を攪して、一味となす」と曰ふが如き、意義しや、色々と器物の名こそ違へ、金の性から見れば、孰れも皆一色じや、賢首大師が、則天武后のため、宮中の金獅子を鑿へにとりて、華嚴の道理を説き明かしたも、之と同様な趣じや、うれで人々の本具せる自性から見ると、矢張り萬物一体、天地同根、菩提から見れば、皆菩提、地獄から見れば、皆地獄、萬里一條の鐵に似て、たゞのべつけじや、故に萬物を体して自己となすと云ふて、天堂地獄穢土淨刹、看來れば皆自己本來の面目でないものは、實際この境涯に遊ぶものは、聖人じや、多くは頓に理のみを悟りて、日常見苦しい行がある、正邪辨せず、眞偽焉ぞ分たんどは、經に依り教を闕して、牛の蹈みちらした跡かたを見つけたと云ふも、まだこれが好いやら、悪いやら、何とも決擇がつかぬ、かくては得道の人とは、いはれぬじや、眞個牧牛の人とは言はれぬじや、故に斯門即

ち眞實の處に、入得せぬうちには、權りに牛の跡ぐらいを見つけたと云ふのである。

頌曰

水邊林下跡偏多、芳艸離披見也麼、
藏他、
縱是深山更深處、遶天鼻孔怎

さて本來放れたどの牛は、何處に居るであらうかと、だんく尋ねて行けば、水のはどりに、林のうちにも、牛の足跡が多いことじや、それもそのはづじや、諸經諸論祖錄、所々の所説は、實にむさくしいぞ、併し迷ふて居るものには、煩惱妄想が雜草の離披として、繁り生うたやうなもので、中々眞實の箇處が見えぬいて、芳草の離披たる處、即ち箇の消息を露はす處で、牛の頭角は崢嶸として、少しも隠れては居らぬが、大方は見ぬまいぞ、一切たゝかいて、やりたばかりでは到底も知れぬ、何の役にも立たないじや、縱は深山、更深處なるもと云ふは、天は三

十三天の上までも、地は奈落のどん底までも、斯牛の角は屹然として、指さすことも出来ぬ、遼天の鼻孔は、天にも地にも山にも川にも充ち満ちた、避けかくれんとして、山又山を越えて、奥深く入り込みたりとて、如何して、他を藏すことが出来やうぞ、他とは何物か、うは人々の心の中に尋ねて、冷暖自知せねはならぬじや、この頌は三首の中で上等だ、

和

枯木巖前差路多、艸窠裡輓覺非塵、脚跟若也隨他去、未免當頭墜

過他

枯木巖前とは、大地寸土なしの境界じや、何とぞ一たび、かの水牯牛を識得せん者と思ひ、脊梁骨を推つ立て、死力を出して工夫を凝せば、全体分別もなく、前後際断して、大死底の人に如同するやうになる、一たび此處に至らぬと、何とも勝負がつかぬ、氷の張りつめたやうにな

りて、晝夜をも知らぬ田地、これが險崖に手を撒するときの様子、併し此にて休し去らんとするは、大間違ひじや、少しでも一念を起して、如何と見たなら、天地懸絶する、それで枯木巖前差路多しと云ふのじや、中々さつとやることではない、艸窠裡に輓すとは、妄想分別を謂ふ、文字言句を謂ふ、何でも尻の据ゑ所があつては、大自在を得ることが出来ん、理屈がどふじや、哲學がかうじや、なほ、思量計較にわたつたら禪學は薩張りだめとなる、自ら求めて窮屈な穴のうちに坐りこんで、そして之れが命にも代へられんとて、大事にかけるは、誠につまらぬことではないか、天下は廣い人は多いが、非を知るものは幾人もあるまい、眞實の牛を見付て、安心立命せんとならば、文字言句や、妄想分別の窠窟を出でねばならんぞ、さはいへ、脚跟若しました他に隨ひ去らば、此牛を見んと云ふならば、一念も牛と云ふ心が起つたならば、中々に相見することは出来まいぞ、見やうとすれば隠れ、見まいとすれば

は歴然、何としたりれば良からうか、さてく厄介な牛ではないかいな、未だ當頭に他を蹉過するを、まぬかれずとは、今説いたやうな義理じや、

又

見牛、人少、覓牛多、山北山南見也、歴、明暗一條去來路、箇中認取別

無他

本來具有底の水牯牛を、あちらか、おちらかど、尋ね廻る人は多いけれども、しかど徹底して、儘に吾掌を見るが如くに見はして、自己を識得するものは少い、かの文字葛藤を喜ぶものは、朝から晩まで、口角泡を飛ばして、議論をしたる筆の先を禿にして、解説したりするけれども、一向無眼子じや、頂門に一隻眼を、そなへてをるものは、容易に見當らぬ、山北山南か、溪東溪西か、めつたにうろついて、いても、見ゆるものじやない、さらば何處か、密の更に密處に、かくしてあるかど云ふに、そ

うでない、眼の前に、いつもくちらついてをる、溝にも一ばい壑にも一ばい、自分で眼を閉ぢて居ながら、見やうくとしたどて、そは到底だめな話じや、明暗とは相對のものを、何でも云ふのじや、善惡でも是非でも吉凶でも、何でもかでも、皆かまはぬ、行住坐臥喫茶喫飯咳唾掉臂只一條と、是は牛をなんでもないものにした、不生悟り、役に立たぬじや、こゝでかうと、認取したなら、別に牛はないぞ、此がさうじやと云ふ、これを認得したらば、自救不了じやぞ、何でもこれと云ふ、取り留めた處があつたなら、もう千里万里そこには、疾づくに居らぬのであるぞ、二道の歌は、

心ざしふかき深山のかいありて、枝折のあとを見るぞ嬉しき
ねぼつかな心つくしにたづぬれば、行衛も知らぬ牛のあと哉



見牛序三
 從聲得入見處達源六根門着着無差動用中頭頭顯露水中鹽味

色裡膠青貶上眉毛非是他物

愈自家屋裏の天眞佛に、相見したと云ふが、聲より得入すれば、見處源に達ふ、必ずしも耳よりすと限らぬじや、六根同時なれど、假りに一塵を擧げて、聲より入ると云ふた、耳根圓通の義に依りて、一擊の下に於て念せば、八万四千の法門悉く這裡に具はつてをる、初の此二句は、「見色明心聞聲悟道」と云ふ語があるが、それから出て來たのである、六根と云ふは、眼耳鼻舌身意じや、根とは意識の所依であるとの義、今日の言葉にて言へば、六根は五官に、一の意識を加へたのじや、人間は、これらの六つ道具で、種々に活動して居る、さて自己の水牯牛を見得して、宇宙の根源に徹底したと云ふなら、目で見ると、耳で聞く上、鼻で嗅ぐ上、舌で味ふ上、身で觸るゝ上、意で思ふ上、皆悉く全体を具足して、少しも間違ふことはない、故に孔子も道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらずと曰はれた、行住坐臥の間、咳唾掉臂の中、日常動作運用

のうへにありて、頭頭顯露せずと云ふことばない、昔し宋の大惠禪師は、八翰林の才ありと云はれた學者なるか上に、宗旨の力も非常であつたが、其人が時の湯亟相に答へた書面の中に、「動轉の時に當つて、亦動轉底の道理なし、自然に頭頭上に明かに、物物上に顯はる、日用應縁の處、或は淨或は穢、或は喜或は怒、或は順或は逆、珠の盤を走るおどく、撥せずして自ら轉す」と云ふことが書いてある、高く眼を着けて能く見るが好い、併し水中の鹽味、色裏の膠青で、一寸見たばかりでは、わからぬじやて、傳大士の心王、銘に、「水中の鹽味、色裏の膠青、決定是れわれども其形を見ず、心王も亦爾り、身内に居停して、面門より出入す、物に應じ情に隨ひて、自在無礙なり」とあるが、もし具眼者ありて、仔細に點檢し來れば、全躰了々として分明じや、どうして、かくされるものではない、但うるたるて、眼をばちつかせたり、眉を動かしたりするときは、早く過ぎ去つて仕舞ぞ、電光石火の機よりも急じや、

頌曰

黃鸞枝上一聲聲、日暖風和岸柳青、只此更無回避處、森森頭角畫難成、

是れまで、そこかこゝかど、迷ひあるいたが、愈入得して見れば、水鳥樹林念佛念法、到る處に佛陀の大光明が輝きわたつてをる、古今集に「見わたせば柳櫻をこきませて都ぞ春の錦なりける」と云ふ歌があるが、實に其通りじや、黃鸞枝上一聲聲で、春の日の暖がらかな天氣に、香かぐわしき梅の枝、法華經「と、轉りて、あちこちに飛びかゝ、驚、さつと吹き來る風は、袂を拂ふて心地よく、水邊に立つたる柳は、なよよとして、波に接吻してをる、まゝ何と好き景色ではないか、是が自己本具底の面目か、併し文字にのみ、縛られては、永劫出離の時期はあるまいぞ、黃鸞枝上一聲聲、日暖風和岸柳青、此二句實に絶唱じや、只此の如くに、盡大地是れ解脱門、推せども出せず、ひけども入らず、更に回避す

る處ないのである、東坡の偈に「溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身」と云ふのがあるが、此の牛の頭角は森々として、天地に塞がりたる、それで所謂我法は妙にして思ひ難しと、釋尊はいはれる、中々箇中の消息は、畫けども成らず、描けども寫し難しで、言語道斷じや、こは敢て秘密にするど、云ふわけでない、言はれぬから言はれぬのである、わからぬものは、自ら參究して、一たび冷暖を自知するがよい、

和

識得形容、認得聲、戴嵩從、此妙丹青、徹頭徹尾、渾相似、仔細看來、未十成、

本來失つたことのない是、牛、さて愈、其形を識り得たとすれば、はあどあされるばかり、冷暖自知の境涯は、何とも言ひやうがないじや、聲を認得すと云ふは、天地に満ちた聲じや、山僧が即今說法底の聲じや、この聲を一たび認得してからは、戴嵩も非常な畫工となつた、段々に工

夫の上に工夫を積み、辛苦の上に辛苦を重ねたるによつて、遂に忽然として一疋の活牛を描き出した、戴嵩とは何許の人かわからぬが、牛を畫く名人で、「韓幹馬、嘶、青草渡、戴嵩牛、臥、綠楊陰、韓幹と並び稱せられたる、有名な畫工なれど、此には其畫工の噂には、貪著ないのじや、妙丹青とは戴嵩の畫いた牛のことではない、柱の直きも敷居の横なものも皆牛の姿じや、手に任せて書き出すに、中らずと云ふことではない、眞實の處に徹底すれば、皆この通りじや、それで徹頭徹尾とこも、かしこも、牛ばかり、また何を疑はんである、されど仔細に點檢し來れば、まだ手放しのできぬ所がある、戴嵩の妙手でも、この牛を寫すことの出來ぬ處がある、眞實吾、自己の菩提には、形跡だの色聲だの、沙汰はないはづじやに、形を存するやうでは、未だ十成と云はれぬわけじや、これは青州布彩等の話を透過せねば、わかるまい、青州布彩の話とは、一僧因に趙州和尚に問ふて、萬法は一に皈すと云ふが、其一は何れの處に皈

するぞと曰ふたれば、趙州は我青州に在つた時、一領の布彩を作つたに、其重さが七斤あつたぞと、答へた、是一條の問答が、今に傳はりて一の公案になつてをる、それが解つたなら、「仔細看來、未十成」の義理も合點がゆくであらふか、

又

蕎面相逢不逐聲、此牛非白亦非青、點頭自許微微笑、一段風光畫不成、

是までは音をたよりて、これかあれかど、あてつくらべつしたが、今始めて鼻の先に衝きあつた、能見の牛と所見の牛と、見逢ふたさまは、両鏡相對して、中に影像のないと同様、此境涯に到らぬでは、參禪もなにも話しはできぬ、唯人の言語をたよりにしたり、諸佛の經文をありがたがつたり、知識善友に隨ふて求めたり、したとて、何の益にたつものか、是等は、皆聲を逐ふもので、迷ひの衆生と云ふのじや、白隠和尚の

所謂る葛藤窟裡の痴漢、多聞門外の風狂とて、口を極めて罵しられる人々じや、さて露地の白牛を捕捉し來りたと云ふが、能く見れば、白でもない、尙更青ではない、又男でもない、女でもない、何でもない、かでもない、そんなら何じや、一たび放身捨命して、この鐵櫃子を堅に咬み去り、横に咬み去りたなら、遂に忽然として牙に和して、咬破し了る時節がある、其時始めて我と我手を打つて、點頭して自ら許すであらう、歡喜の餘り徹々として、旨い〜と笑を洩らす場處があるのじや、併し此微笑の端的、點頭の處は父子不傳じやによつて、描きたとて、成るものではない、詩は會人に向て吟じ、酒は知己に逢ふて飲ひ、這裡の消息は到底知音でなければ分らぬ、例の如く二首の和歌は

青柳の糸の中なる春の日につね遙かなるかたちをぞ見る
はへけるを（遊歴論）しるべにしつゝ、あらうしのかげ見る波邊に尋ねきにけり



得牛序四
 久埋郊外今日逢渠由境勝以難追戀芳叢而不已頑心尙勇野性
 猶存欲得純和必加鞭撻

是よりは牧牛の法を述べた曠劫以前よりこのかた追放してをいた野原に捨て、をいたが段々に骨折の功を積んだので、到頭今日は渠に相見することが出来た、白隠和尚が隻手をつき出して、何の聲あると曰ふたが、今は彼の舌頭につきまわされて、うるたぬるやうなことはないはどに、賊に目出度し、くじや、けれども、まだ安心の出来ぬことがある、牛を捉へ獲たとは云ふもの、まだ善悪是非の境に奪はれて、どふも本分の家山に乗り込みにくいぞ、動もすると、もとの野原を戀ふて、芳草の裡に逃げやうとする、本分の家山は、こゝじやと教へても、兎角わさみちへ走りたがる、頑心尙勇なりで、手のわにのらぬ、わろきことのみ、好いたがる野性、げびくさつた根性が、なほ残つてをるに由つて、中々思ふやうに自由に使はれぬ、趙州和尚は諸人は十二時に使はれて居るが、なれば十二時を使ひ得ると曰はれたが、これは一朝一夕にして出来ることでない、うんなに純和に、しつとらとなるや

うにするには、必ず鞭撻に鞭撻を加へて、正念相續の外はないぞ、何でも皮下有血底の漢は、眞の丈夫の氣槩をねしたて、しつぱくど、たきぬけて、而して始めて自由になるだらふ、ゆめく油断をせまいぞ、

頌曰

竭盡精神、獲得渠、心強、力壯、卒難除、有時纔到高原上、又入煙雲深處居。

この日牧牛を得んために、思慮分別の精神を竭して、勉強して、遂に彼を捉へたとは曰ふもの、野心妄心強くして、六塵六根の力容易に除きにくい、こゝは亦血の涙じや、看よ佛も大覺を得らるゝまでには、五百塵點劫の間、菩提を脩せられたと曰ふではないか、この大道を吾ものにせんことは、なかゝ容易なわざでないはせに、れうさんさの苦を、親しく嘗めねはならぬ、固より一小技藝を習熟するにしても、艱

苦は到底避くへきものにあらざるに、まして此事の研鑽は、人生の一大事因縁であるものを、さつと心得られては、大間違じや、達磨大師も小徳小知輕心慢心では、せふして眞乘を冀ひうるかど云はれたが、今の世には往々淺蕆な考をもつて居て、禪學を一場の談柄に充んとするものがあるやうに思はれる、誠ににがしき話じや、うれで牧牛の困難なるわけは、あるときはやうく高原の上に、引き留められたかと思へば、又々煙雲深く鎖して、檜原松原れひ茂れる中に、逃げこんで仕舞ふ、この義は何を曰ふかど尋ぬるに、學者(修行者のこと)が精神を抖擻して、勇猛に坐禪するときは、眞箇の大白牛出現して、日月も光なく乾坤も色を失し、万里寸草なしと云ふ境涯に入る、煩惱もなく菩提もなく、はらひはてたる上の空じや、之を高原の上に到ると云ふが、暫らくすると無明煩惱の風が、又々吹き來りて、今時那邊と兩端に跨りて、思ふやうにならぬ、これでは何の坐禪の甲斐もないではないか、併

し此で一寸注意してねかねばならぬ一事がある、それは何かと云ふに、万里無寸草なと、云へば、空々寂々たる境涯じやと、思ふ人もあらんかなれど、それは八識が一時鎮まつた時節なので、ほんどの悟ではないぞ、哲學者とか何とか云ふものは、悟りを以て迷の外に、別にあるものやうに思ひなせども、元來悟も迷もないのじや、彼等は悟を以て建立となすか故に、分別妄想の窠窟を脱することか出来ぬ、頑空無記の處に、尻を据ゑて居るのは、無分別の處に似たれども、其實は生死の大本根と、世間には二乘偏枯の邪禪を以て、究竟じやと認めて居るものも、あるかはしらんが、吾が所謂禪なるものは、決してく、斯かるつまらぬものではないぞ、この區別を能く心得てねかねば、毫釐千里を誤る道理、何でも仔細にせねばならぬ、

和

牢把繩頭、莫放渠、幾多毛病、未曾除、徐々、驚鼻牽將去、且要回頭識

舊居

この牛は中々面倒な牛じや、一寸でも鼻頭の索を取り放すと、さきの草原に隠れやうとする、それでしつかど、繩頭をつかまへて、決して之を放つまいぞ、八識に薰じてをる、無始劫來の習氣が、ちよこど、頭を擡げ出すから、油断は大禁物じや、毛病と云ふは如何なる病にや、分明ならず、虛堂錄に「人間四百四病、病々有藥、唯、有毛病、難醫」とあるが、思ふに、微細の煩惱を指せるならん、この微細の煩惱を取り除かんには、徐徐に牛の鼻づらを捉へて、引き將ち去らねばならん、ちよつと踏みはづすと、三塗の淵にはまる、是一番大事じやと、引き回して本分の舊居を識らさねばなるまい、舊居とは六塵の方へ引き出されて、善惡是非の境につきまわされてをる、牛の頭を引き回して本分の處に入らしむるを云ふのじや、さは云ふもの、徹底したる人の眼より見れば、牛が引き出されると云ふ處もなく、引き回へされると云ふ處もない

のである、これが本分の舊居だとか、あれが六塵の假住居だとか、うんなくだらぬ區別は、眞個徹底見性の眼にはないのである、それで且と云ふ字を此に置た、是が字眼じや、能く意を注いで見るがよし、

又

芳草連天捉得渠鼻頭繩索未全除分明照見歸家路綠水青山暫寄居、

芳草天に連なる處、即ち是れ自己本來具有底の牛か、こゝを離れて東西南北に向つて、求め去り求め來たどて、畢竟して見當ることはない、回光返照して、煩惱妄想の中を見よ、百草頭是れ牛なることがわかる、然れども少し油斷をして、鼻づらの繩を放すと、直に驅け出すぞ、中々この手網を除くことは出來まい、成程こゝが本分の家山じやと、分明に照らしてをるは、をるけれども、本のすみ處の野心は、矢つぱりまだ除かれぬ、飯家の路どて、別にあるではなく、牛が直に是なれど、又綠水

青山じやとて、暫く寄居する處があるのではないけれど、彼も此も照しみれば、打成一片となるじやけれど、是はたさうはいかぬ、故に何でも吾等は骨折りて、此水牯牛を自由自在に使ひ得るやうにせねばならぬじや、二首の和歌は



放さじと思へば(一度得力の上では悟りがなくなる)いと心うし(牛を引かんとすれば)
 是ぞ誠のきづななりけり(た放生のきづな)
 どりぬてもなにかと思ふあらうしの(取り放生した)つなひくほどに(牛の
勝つか願力)心つよさよ(妄想)
煩悩)

牧牛序五

前思纔起後念相隨由覺故以成眞在迷故而爲妄不由境有唯自
 心生鼻索牽牽不容擬議

漸くに捉へたる此牛是非に教し得てんと思ふても中々たやすくは
 手馴れぬこそ笑止なれ一旦の得力はあつたにしても悟後の修行は
 亦一通りでない先づ忽然として一念起ると段々にそれについてま
 わつて又種々の思慮分別が出て来る故に警起是病じや起信論に覺
 知前念起惡故能止後念令其不起とあるがさうでなければならぬ又

牛頭融大師の心銘に念起念滅前後無別後念不生前念自滅と書いて
 ある同じ道理じや只禪の要は執着をとるばかりぞ外から一物を添
 へるのではない覺るが故に眞となると云ふも其悟は師家から貰ふ
 のではない佛祖から授かるのでもないゴツドから恵まれるのでも
 ない無量劫來の生死の種子即ち前念後念と執着する其迷を一刀兩
 斷にして見れば迷もなく悟もなく本來如々じや併し不思議なこと
 には迷悟なき處に迷悟があつて本覺の水牯牛に立飯れば物々皆眞
 已に迷ふて物を逐へば事々皆妄となる併し是れは万縁万境の上に
 眞と妄とあるのではなくて自心がうるつく故で生死輪廻の業因を
 造るのである自分が對する前境に善惡迷悟の差別があつてそして
 自分の心にそれが映ると云ふわけではないはゞに覺に由るが故に
 成佛作祖し不覺に由るが故に生死流轉す皆自ら求めて爲すわざで
 あるぞわれじやこれじやとうるつかぬやふに牛の鼻づらを引き捉

へて、擬議分別を生せぬがよい、是か牧牛の第一義じや、

頌曰

鞭索時時不離身、恐伊縱步入埃塵、相將牧得純和也、羈鎖無拘自逐人、

悟後の脩行の有様を述べたぞ、たとひ一旦の慶快はありども、人生には種々の境涯がある、一々差別の中に入りて、時々刻々に鞭索を加へねばならぬ、もし又悪趣に墮するやうなことになるつては、悟も何の益に立つものぞ、宜しく本參の語頭に鞭ちて、四威儀の間少しも油断すべからず、或はかの水牯牛が、そゝろあるさして、塵欲の中に埋れたりしたなら、九仞の功を一笑に欠くの悔がある程に、併し自ら勵みさへすれば、荒牛も次第く手馴れて、身に添ふ影の如くなるじや、去年より今年はしつとらとして、自在に使ひまわされるやうになる、さすれば別に拘束を須るすども、自ら我を逐つてくるぞ、もはや遁げる

氣遣ひなければ、警護も無用じや、

和

甘分山林寄此身、有時亦蹈馬蹄塵、不會犯着人苗稼、來往空勞背上人、

第一句は上求菩提の様子じや、山林とは本分牧牛の處をさす、此處には生死の脱すべきなく、菩提の求むべきなく、天地たゞ一枚ぞ、平等無差別の法界に、此身を打込めは、牛と我と二つはない、佛祖も魔外も、畢竟閑名字じや、併しこゝばかりでは、十分であるまい、それで有るときは、馬蹄の塵をも厭はずして、下化衆生と打つて出る、馬蹄の塵とは、六塵紛飛の境涯じや、多年辛苦して育てた牛だから、今は頑心野性もなくなつた故、街道筋へでも出て、茶荷など付けやうかと云ふ、菩薩の威儀を示したのである、第一句は平等の法門、第二句は差別の境涯、水牯牛を馴致し得れば、何れへでも勝手次第に入込みて、更に他の役する

所とならぬ、臨濟禪師の、隨處に主となり立處皆真と云ふ、境涯にまで
牧牛した、牛山中に来るときは、草足り水足り、牛山中を出づるときは、
東に觸れ西に觸る、何も縛著粘著はないぞ、山林に入るときは、悟るが
如くにして、市廛に出るときは、迷ふやうでは、到底駄目な話じやが、今
は決してそんな心配はない、本分家山でそだてた牛なれば、世間へ出
しても、人の苗稼を食ふが如き不調法はないのじや、千變万化の中に
入りても、少しも規矩法度を誤まらぬだから、來往空しく勞す背上の
人で、牛かひも別に無駄なことじや、何も特更に警護する必要がない
から、山に入り市に出づる、空しく背上の人を勞するわけぞ、

又

牧來純熟自通身、雖在塵中不染塵、弄來却得蹉跎力、林下相逢笑
殺人。

心を竭して牧した甲斐があつた、日久しくして自ら純熟し來れば、行

住坐臥全体の牛となつた、身に添ふ影の如くで、離れんとするにも離
れられぬ、三毒五欲の中に在りても、其塵に染むやうなことはない、丁
度海に住む魚に鹽氣がなく、水に棲む鳥の羽に水けのないと同じこ
とぞ、此くて段々と飼ひ育て、行くと、卻て生死を失し涅槃を失す、佛
祖も手を挾むとのならぬ、時節に撞着する、こゝが大切じや、蹉跎とは
足を失する貌、ふと躓きて悟をも失ふ場所を歴ねはならぬ、吾が牛や
ら牛が吾やら、牛と共に打失した、これが因地一下の時節、嬉しや、
これからは、どこもかしこも、我林下我家ぞ、人を笑殺すとはめつたに
うれしいをかしい大歡喜の地、二首の和歌は、

日數へて野飼の牛も手馴るれば、身にそふかげと成そ嬉しき
尋ね來しまきのうね牛とりぬつゝ、飼ひ育ふは心に静なりけり



騎牛歸家序六

干戈既罷得_レ失還空唱_レ樵子之村歌吹_レ兒童之野曲身_レ橫牛上目_レ視雲霄呼_レ喚不回撈籠不住

脩行を重ねたからして、今は歸家穩坐の好時節となつた、併し歸るへき家とて、別に有るのではない、心が直になれば、自ら家山に歸るじや、行先々が悉く本分の家山じや、干戈既に罷み、得失還た空すとは、煩惱も菩提も一齊に打失して、話頭公案などの諸道具のいらなくなつたを曰ふのじや、今時那邊のあせがされて、涅槃佛界と云ひ、生死衆生界など云ふ、閑妄想もすつくり取れて仕舞つた、悟らぬ中は、三毒五欲の塵に塗れてをる、言ふに足らずじやが、扱悟を開いたとなつても、佛見法見は容易にどれぬ、迷の垢はどれども、悟の塵がくつゝいて居るやうでは、まだ初心じや、それが次第に脩行をつむと、自然に胸中が清々となる、もう牛の野性頑心が止んだによつて、自由にどりあつかはれるぞ、そこで之に打騎りながら、樵夫のうたでも、村童の曲でも、歌ひながら、悠々としてそゝろあるさじや、誠にかゝりかつばのない様子、とても學問や理屈ではいけるものでないぞ、多少利發なもの、は利發だ

けに、煩惱が多く、位置じやとか官爵じやとか、高い低いものは、また其相應の無明がある、だから善悪是非の境に臨むと、手脚忙亂して實に見苦しい、却て三家村裏の省事漢にだも及ばない、身を牛上に横へどは、差別紛雜の境界にをるも、更に其がため奪はれぬ様子、白牛背上太平徹底の當鉢じや、どこにゐても大白牛兒は、推せども去らず、ひけども入らずぞ、目に雲霧を視る、志がけだかい、諸佛の取るべき處なき眼なれば、はれあがりたけ上りて、實にうづ高い、大道を得た人ぞ、「自是風風臺上客、眼高看、不至黄金」と云ふ境涯か、更に言を詳にして曰へば、呼喚すれども回らずで、つちあつちと、迷はさうと思ふて、呼べども呼べども、今時の境界に轉せられぬ、丁度水急なれども、月を流さぬと、同じやうなものを、呼べども頭を回さぬに由つて、さらば一番撈籠して平等無差別の處に、引き据えやうとしても、亦そこに止まらぬ、本分の家山も白牛も、眼前にちらつかぬじや、「世間無物、可羅籠、獨立嵯峨、萬仞

頌曰

騎牛迤邐欲還家、羌笛聲聲送晚霞、一拍一歌無限意、知音何必鼓唇牙、

今時那邊のあせがされ、煩惱菩提のへだてがなくなつた、乾坤只一人、ふら／＼と牛に騎りて家に飯らうか、あまりの面白さに、羌笛數曲をふきならして、一聲聲とやつてくるうちに、段々ど日は夕方になつたか、霞がそこ／＼に立ち塞つてきたが、それも次第／＼に消えて、笛の音もやんだ、明暗双々、佛と我と一歩／＼に、無分曉となつたぞ、そして其無分曉の處より、一拍一歌と調子をとつて、謠ひ出す處、實に言ふに言はれぬ、無限の意味がある、この無限の意味は、たどひ如何なる知音と云ふても、かれこれと唇皮を動して、言句に現はしやうがない、面白いも、をかしいも、言葉には出されぬ、此が世尊拈華迦葉微笑の芝居の

出處じや、嘗て釋迦が靈山會上で、金波羅華をくれたものが、あつたによつて、それを大勢の弟子の前にて、すつと拈出してみせた、何にも言はずに、たゞ、すつと一本の華を取り出されては、如何な物知りも、何の意味があるのか、さつぱりわからぬ、それで大勢の弟子も、譬の如く、譬の如くであつたが、中に一人の迦葉、何を思ふたか、破顔微笑した、そしてたうらね釋迦は、之を見て我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門あり、之を摩訶迦葉に授くと曰はれた、この一段限なきの意は、唇牙を鼓し得る處ではないぞ。

和

指點前坡、即是家、旋吹桐角、出煙霞、忽然變作還鄉曲、未必知音肯伯牙、

始めより失ひもせぬ牛じやが、一旦迷うて取逃したと云ふか、それをまた手に入れて、段々と手馴して見れば、昔しは前坡じや、野原じやと、

思ふたところも、豈に圖らんや、我が本分の家山であるぞ、昔はすつと見わたして、遙か向ふの野山は、他人のものかと思ふてゐたに、今は何處も我家山となつた、始めは桐角(軍中に用ゐる笛此には別に義理なし)を吹きつゝ、煙霞の中から出て、我家山はあちらであらふか、こちらであらふかど、様々に尋ねまわつた、ことであつたに、心をつけて居たので、忽然前どちがつてきた、落節の處、因地一下を得たと云ふ、さきの亂れぶしは、俄かに還郷の曲となつたぞ、是煙霞を出づる端的よ、そかと思へばそでない、本々住みなれた家山じやによつて、還郷の曲をかなづる、併しこの曲の妙處を、必ずしも肯がつてくれるに及ばぬ、縦ひ伯牙の如き妙手が彈するので、知音は必ずしも之を肯はない、而かも其肯はない處が、眞箇の知音ぞ、昔し福州の靈雲志勤禪師と云ふは、桃の花の開くを見て、悟道をしたと云ふが、其悟道の頌に、「三十年來尋劍客、幾度葉落、又抽枝、自從一見桃花後、直至如今更不疑」とある、玄沙

和尚は之を聞き、「諦當なることは甚だ諦當なり、敢保す老兄猶ほ未
徹在なるとを」と云ひ、雲門和尚は、甚の徹不徹とか説かん、更に參せ
よ三十年」と云はれた、是二師は甚だ靈雲を肯はぬやうだが、眞箇の知
音底じや、伯牙の事は列子の湯問篇に出てをる、曰く「伯牙善く琴を鼓
す、鐘子期喜く聽く、伯牙琴を鼓す、志高山に登るにあれば、鐘子期曰く
善哉峨々たること、泰山の若しと、志流水にあれば、鐘子期曰く善哉洋
洋たると、江河の若しと、伯牙念ふ所、鐘子期必ず之を得云々、」

又

倒騎得得自歸家、箆笠箆衣帶、晚霞步々清風行處穩、不將寸草掛唇牙、

倒まに騎る處實に大安樂の處ぞ、今までは本分の家山へ向けて、乗り
込んだ、牛の方へと乗り込むだ、扱みれば上下四維家山ならぬ處はな
い、こゝを向へばかり騎て行く、衆生に知らせばやと思ひて、手綱をひ

きかへして、得得として倒まに出て行く、出て行ても矢張り皆家山じ
や、却來の處が即ち歸家の處であるから、箆笠箆衣是が牧人の實の姿
ぞ、人道を得ても本の形を改めずじや、奇怪ではないか、倒まに牛に騎
たる人が、箆を着て笠を被つて、人里遠く離れた山道を、たどりく、て、
家に歸らんとすれば、晚霞何れよりか、立ち現はれけん、そこら一面に
模糊として、途をもわからぬやうになつた、是が無分曉の境涯、その境
涯に到りて見れば、歩々清風起るぞ、行々穩密の田地ならずと云ふこ
となしじや、隱居も大屋も、敢て一寸草の齒牙を縛するものもない、世
間有爲の法など、そんなものは少しも目に留まらぬ、言ふことも語る
こともなにもないぞ、光明寂照偏河沙じや、だら壺の中まで、眞身舍利
じや、更に足手まといは、ないほどに、二首の和歌は
すみのぼる(今時那邊空盡し)こゝろの空にうそふきて(んぞ)たちかへ
り行みねのしらくも

かへりみる遠山道の雪さなて(三)の隔の雪が消えて(一)こゝろの牛にのりてこそゆけ(んだぞ)



忘牛存人序七

法無二法、牛且爲宗、喻蹄兔之異名、顯釜魚之差別、如金出鑛、似目、離雲、一道、寒光、威音劫外、

次第く境涯が進歩してくるに注意せよ、此は天台に一心三觀と説く、假諦に當るぞ、曹洞下の五位では、偏中正の位じや、こんなことは今此にて、精しく辨するひまがない、本文の義は法に二法なしで、如是境涯に到れば、只牛一匹となる、名こそ種々なれ、躰は一つものである、如是の自己の心に養ひ得たれば、牛且つ萬法皈入の宗となつたぞ、物我不二平等一枚の境涯、只菩提の信心のみになつたぞ、既に根本を得れば、百千の經文も、幾多の公案も、何もいらぬ、兔をどらぬうちは、蹄も大事、魚のかゝらぬうちは、釜も大事ならんが、既に法味を嘗めたなら、七覺支、八正道、五根、五力等のわな、頓漸半滿權實など、五時八教の分ちも、総に是れ閑家具ぞ、蹄釜の事は、莊子則陽篇に、釜は魚に在る所以、魚

を得て而して筌をわする。蹄は兔に在る所以、兔を得て而して蹄をわする。とあるが、其意は大義さへ分明なれば、文字をわすれよと云ふのじや、さて文字を離れて天真獨朗の趣を會すれば、丁度あらがねの中より、黄金を取出したやうなもので、純粹無雜、又浮雲を離れいでた、月のやうに、晴わたりて、照らさぬくまはない、諸佛と衆生と、不二なるによつて、一道の寒光、天を照らし地をてらす、三世古今一貫じや、諸天善神も花を捧ぐるに路なく、邪魔外道も潜かに窺ふに門なしぞ、威音とは法華六常不輕品に、佛得大勢菩薩に告げ給はく、昔し無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぎて、佛ありき、威音王と名く、彼の世の中に在いて、天人阿修羅のため、に説法す云々、とある威音劫外とは、天地未分以前の義としれ、

頌曰

騎牛已得到家山、牛也空兮人也閑、紅日三竿猶作夢、鞭繩空頓草、

堂問

大白牛車に乗り得て、家郷に歸り來たと云へは、世間の法と佛法と二つはない、境涯に到つたのである、明惠上人の歌に、後の世のつとめも今は何かせんあうんの二字のあるにまかせてとあるも、此頌の意ぞ、さて既に家山に到れば、今は騎つて來た、牛をもわすれて、此身は閑々たりじや、度する人もなければ、度せらるゝものもない、安閑無事の消息、うれで東天紅を放ちてから、日は早や三竿になるまで上つたなれど、大びまがわいたれば、うつそらふいて、白河夜舟じや、昔しは牛がさかぬと云ふて、しつばくと鞭をふりまわしたり、鼻づらを牽き、將ち來つたりしたれど、今やとんと其な用がなくなつたので、其鞭も其繩も牛小屋の中にほかしてある、思へば古則だとか公案だとか曰ふて、さまざまに苦心焦慮をしたこともあつたが、今から見ればつまらぬことじや、一休の歌に、忘れじと覺へしうちは忘れけりわすれて後は

忘れざりけり」とあるが、是亦此頌と同意義じや、されど此にばかり尻を据えて居てはならぬ、更に一步を進めねばならぬぞ。

和

欄内無牛趁出山、煙蓑雨笠亦空閑、行歌行樂無拘繫、贏得一身天地間、

昨日まで牛を捉へんとしたが、今は牛もない、併し其無き處を認めてはならぬ、而かも其ないと云ふ處を趁ひ出すとは如何、この境涯になれば、煙蓑雨笠など、昔し牛をとりまはすに、用ゐた道具もむだじや、古則公案等も閑家具となるぞ、わら樂し虚空を家山としすみなれて須彌を枕に獨寐の春、行歌行樂勝手次第氣儘にすれども、何にも拘繫せらるゝやうなことはない、それで「一身天地間の境涯をしてとつた、うれしや廻り逢ふたは我れ獨り、天にも地にもさてく、廣いことである、この趣を會すること、中々にたやすきわざならざれど、此處より益、

精彩を着けて、工夫を進めねばならぬ。

又

歸來何處不家山、物我相忘鎮日閑、須信通玄峯頂上、箇中渾不類人間、

歸り來ればと云ふが、往くも還るもじや、殘る處なく、野と云はず山と云はず、全体吾家ならざるはなし、物と我と今時と那邊と煩惱と菩提と、何の差別もない、乾坤只一人で、ぐら玉一枚じや、日も何となく長く覺ゆるぞ、天堂地獄も打成一片とした處を、まづ名けて通玄峯頂と云ふか、此頂上に登りて見れば、渾て人間以外の世界じや、箇の中とは何じや、直下即今吾も知らぬぞ、併し山の上ばかりが、通玄峯頂でない、世間の五塵五欲の中にもありても、そこもかしこも、通玄峯である、天台の徳詔禪師が、通玄峯に住する時の示衆の偈に、通玄峯頂不_二是_一人間。心外無法。滿目青山。とあるが、これが出處じや、二首の和歌は、

よしあしと(悟りに悟り)わたる人こそはかなけれひとつ(男も女も佛も衆
生も一片の境涯
たれは)難波のあしと知らずや
 するべせん(吾もた道へ)山路の奥の(諸人の境
涯では)はらの牛かひかふはどに
 静なりけり



人牛俱忘序八

凡情脱盡、聖意皆空、有佛處不用遊遊、無佛處須走過、兩頭不著、千
 眼難窺、百鳥啣花、一場懺懺、

第七は牛を忘れて人を存せしが、今は牛も人も共に忘れた境涯、人境
 兩俱奪で、莊子が几に隠れて、吾我を亡せりと云ふと同じや、従前の
 五塵六欲生死煩惱など云ふ、ひさくしいものは、固より脱盡したが、
 さらば之に反して、聖意即ち何かありがたき事でも、覺へたかど曰ふ
 に、是も亦皆空じて仕舞た、有佛の處にもふらくしてをらぬ、無佛の
 處をもどつくに過ぎ去つた、人々がそうして居た處にもをらぬば、佛
 くさくない、平等一片の田地、實際理致、一塵一法をも立せぬと云ふ處
 そんな處にも止まらぬ、昔し趙州和尚、因に僧來りて辞す、趙州乃ち問
 はれるには、汝は甚處へ去るのじや、僧私は諸方へまゐつて、佛法を學

六十一
びたいと思ひますと云つた、そしたら趙州和尚は拂子を竖起して、有佛の處住することを得され、無佛の處急に走過せよ、三千里外人に逢ふて、錯つて擧するを得されと曰はれた、又碧巖集の第九十五則の垂示に、有佛、處不得住著、頭角生、無佛、處急、走過、不_レ走過、脚深、一丈、ともある、熟、世間を見るに、大抵はどちらかに偏する、迷にあらざれば悟か、悟にあらざれば迷、斷見にあらざれば常見、常見にあらざれば斷見、遂にこの兩頭を截斷することが出来ぬ、之を今日の哲學にて曰へば、唯物主義でなければ唯心論か、客觀主義でなければ主觀主義か、相對とか絶對とか、何とかかんどか、實にやかましいことじや、然るに今や兩頭にも、著いてまわらんと云ふなら、觀音大士の千眼でも、窺ふことは相成るまい、たどひ百鳥が來りて、華を捧げるやうなことがあつても、却てこれ一場の懺悔であるぞ、紫雲たなびきて天樂囀院、蓮華亂墮すと云ふても、何にもありがたいとはないぞ、昔し一遍上人が、東海道を往

來せられたとき、三島明神が出て逢はれたと云ふが、其後建長寺の大覺禪師に參禪せられてからは、明神も出なくなつたと云ふが面白い話じや、又禪林類聚に、嘗て牛頭山の融禪師が、また四祖大師に參禪せぬ頃、牛頭山に居て北巖に棲んで居られたが、色々の鳥が花を啣んで來て、供養したと云ふ、然るに其後四祖大師が來て、廣く法要を説かれたを聞いて、遂に融禪師は悟を開いた、了してからと云ふものは、百鳥も花を啣みて來らずなつたと云ふ、其からすつと後に、一僧が南泉和尚に尋ねた、牛頭がまだ四祖に見ぬ時、甚麼としてか、百鳥花を啣んで献じたぞ、南泉うは渠が歩々佛の階梯を踏んたがためぞ、僧さらば見ぬて後は、甚麼としてか來らなんだぞ、南泉たどひ來たらなんだに、しても、猶ほ王老師(南泉自ら言ふ)に一線道を較らべ得るぞと云つた、好く此邊の様子を考がへて見るがよい、禪宗は何なものであるか、

頌曰

鞭索人牛盡、属空、碧天遼濶、信難通、紅爐煇上、爭容雪、到此方能合、
祖宗、

是までは晝となく夜となく、手放しをせなんだが、今は鞭や索は言ふまでもなく、其牛も其人も悉く空になつた、自もなく他もなき、真如法界となつた、佛界と云はず、魔界と云はず、今時那邊のあせがされて、天堂地獄煩惱菩提のけぢめも、すつくりとれて仕舞つた、其さまは碧天空濶として、一塵の目にさわるものもないと一般じや、十界の音信もたゞ果て、一片の虚疑手のつけやうがないぞ、とらゝく燃えたつた火炎の中へ、雪をなげこめば、片端よりみしゝく消えて、一片をも止めぬと同じ道理で、今は是非得失善悪吉凶悉く一炬に付し去つた、佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す、脩行もこゝまでこねば、本當のものにならぬ、故に曰ふ此に到りて方に能く祖宗に合ふと、然れども淺見者は、往々之を見誤りて、禪宗は空理一片を説くものじやと

思ふもある、甚だにがゝしい話じや、文字や口先へついでまはるものは、唯外相ばかりを見て、更に其真髓の何れに在るかを知り得ぬ、更に参せよ三十年じや、

和

慚愧衆生界已空、箇中消息若爲通、後無來者前無去、未審憑誰繼、
此宗、

昔は衆生無邊誓願度と思ひて、種々に學問もし脩行もしたが、衆生本來成佛じや、能度所度共に空じやから、耻かしやとは云ふものゝ、又尊とひ有りがたい所があるぞ、併し箇中の消息をば人に知らせたいと思ふが、世も通せやうがないのじや、後に來るものなく、前に去るものなしとは、生れて來るものもなく、死んで去るものもない、釋迦も世に出でず、達磨も西より來らずと云ふのを、大切な見處じや、既にこうであるによつて、誰れに傳へて此宗を繼かせうか、おかしいが、此宗と

は何を云ふのか、既に後に來者なしであるのに、繼ぐとは何じや、かくては祖庭猶天涯を隔つぞ、

又

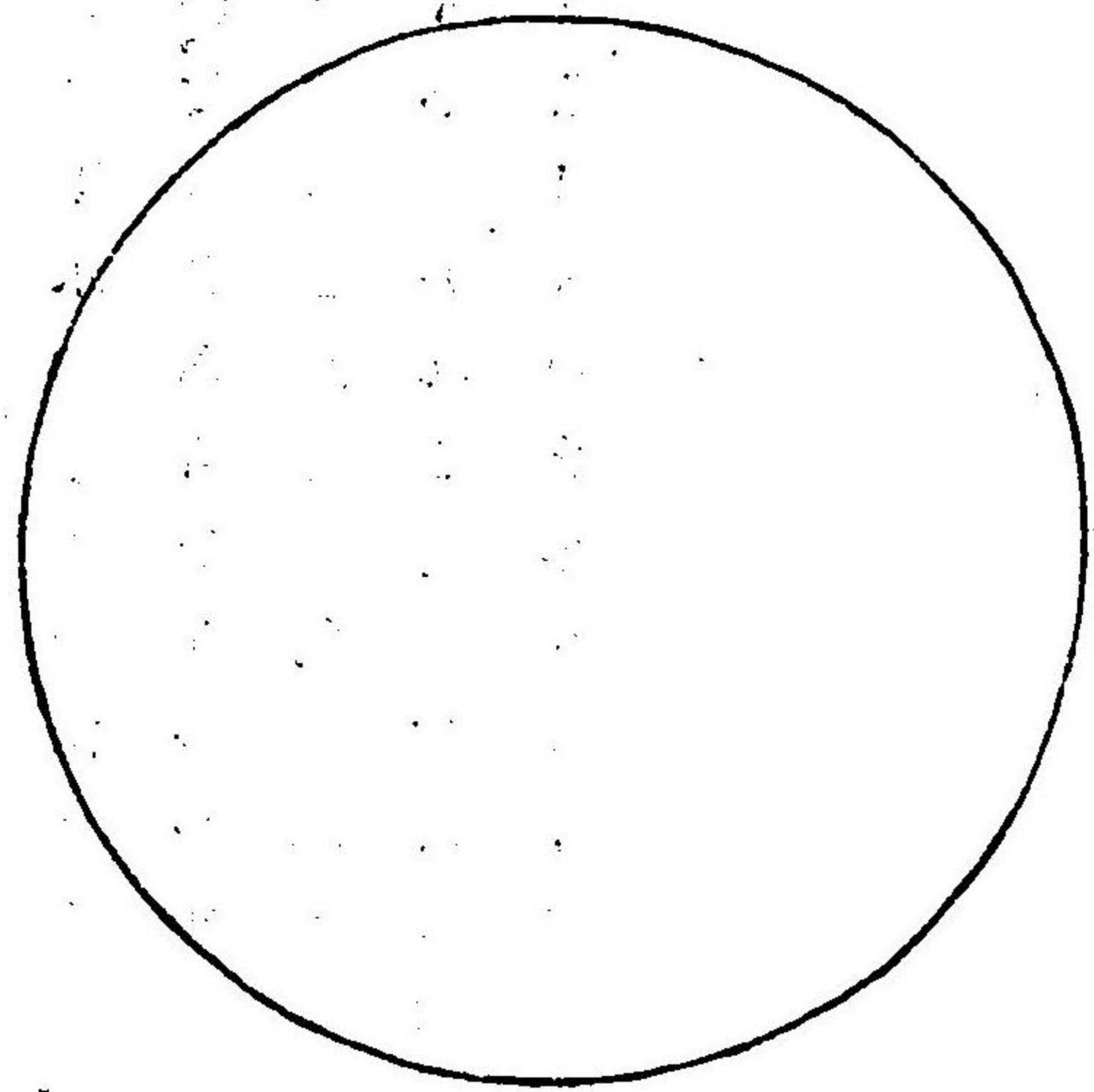
一鎚擊碎太虛空、凡聖無蹤路不通、明月堂前風颯颯、百川無水不朝宗、

此詩は絶唱ぞ、禪門修行の人は是非一たびこの境涯を経ねばならぬ、太虛空が目の前にちらくやうでは、いかぬ、之を一撃に打破して仕舞ふぞ、淨家では稱名不亂の一聲、禪門には州曰無と、之で擊破せねばならぬ、一鎚と云へば業々しいが、時節至れば咳唾の聲でもよいぞ、吾山の開山國師が投機の偈に、一鎚擊破精靈窟、突出那陀、鐵面皮、双耳如雙口、如匣、等閑觸著火星飛、と云ふがある、さて愈擊破し了るとすれば、上に諸佛なく、下に衆生なしじや、又上に片瓦の頭を蓋ふなく、下に寸土の足を立するなしじや、凡だの聖だの、うんな跡方は、けちりんもな

いほどに、實に路通せずじや、佛祖も是れは知らぬのである、ううして見れば、路通せぬ處の景色は、如何にと云ふに、真如の明月は照らさぬ隈もなく、金風颯颯として、うらに一片の浮雲もない、實に清らかな、さつぱりしたものだぞ、これらは境涯じや、口先で何と形容したとて、中々道つ付くものでない、百川水として朝宗せずと云ふことなしとは、父も母も佛、男も女も佛、せきぞろも、ごせのつかさも、なべも茶釜も、皆佛ならぬはなしじや、無量の法門悉く此に入るぞ、二首の歌は、

雲もなく月も桂も木もかれてはらひはてたるうはのうらかな
本よりも心の法はなきものを夢うつゝとは何を云ひけん(此歌は少

法華の龍女成
佛はこそぞ)



返本還源序九

本來清淨不受一塵觀有相之榮枯處無爲之凝寂不同幻化豈假脩治水綠山青坐觀成敗

悟りに悟りて見れば返本還源勘定さだまつた本と末とは手のうらおもてのやうなものじや出家も在家も威音以前より本來清淨草木國土悉皆成佛の處實際理致一塵を受けず佛事門中一法を捨てずじや其佛事門中の相は如何にと曰へば昨日は富貴今日は乞食去年は紅顔今歳は白髮榮枯盛衰夢の如しぞ而かも其夢の如く幻の如く泡影の如き間に在りながら無爲の凝寂を失はぬ諸法寂滅の知見は常に有相榮枯の中に赫いてをる何となれば自己如是の本心は明にもあらず暗にもあらずじや世の寂滅無爲を説くものは有相榮枯の外に厭世的境涯あるやうに思ふうれで佛教を厭世教だなどいひていふもいふ評をする是等は群盲象を摸するもので共に斯立味を嘗むるに足らないさて上の如き境涯を得たるものは世のうろたへものど違ふ衆生の身心は幻化の如く一切ばけものぞ菩薩が自己の位より下りて世相紛々の中に出て又其紛々の塵を揚くるは却來して他

を利する所以ぞ、かの有爲相に、ばかされるものとは、同事でない、しかも是は敢て脩行階級をかるのでないぞ、水は自ら縁に山は自ら青い、亦何の安排計較をからんやだ、法華壽量品には、久遠寶成如來と云ふぞ、おまんは十六おろくは二十、かくて坐ながら別に立て彼是とうるつかぬ、世の成敗利鈍を看る、衆生の根機を察するぞ、

頌曰

返本還源已費功、爭如直下若盲聾、庵中不見庵外物、水自茫茫花

自紅、

返本還源本來成佛なれば、無駄骨を折つたぞ、悟り了れば、未だ悟らざるに同じじや、何の事も無い、魚化龍、不換鱗人得道、不改形もどの黙阿彌か、うれではまたこまるぞ、既に悟りしても何事もないと云ふなら、直下に盲の如く聾の如く、庚申山の猿真似をした方が、餘程よいかしらん、看話禪とか、椅子悟りだとか云ふが、修行も無駄なら、默照邪禪に

如くものぞなきか、うはとに角、近代は此病が頗る多いぞ、之を死猫脱地と云ふ、何でも黒山下の鬼窟裡に、尻をすねて居つて、何時もだんまりを學んでは、何にもならぬぞ、庵中不見庵外物とは、乾峯和尚の傳に、雲門出で、問ふ、庵内、人爲、甚麼、不知、庵外、事、師呵々大笑すとあるが、此の語をとりたのじや、此句迷ふ人多し、庵中即自己真如の上から見れば、外に物を見ぬぞ、水は自ら茫茫として海一杯じや、花は自ら爛熳として山一面じや、是は誰が誠より出たのであらうか、天地獨一主宰の神人が手品師的に作爲したものであらうか、うは人々の工夫でやるがよ、

和

靈機不墮有無功、見色聞聲豈用聾、昨夜金鳥飛入海、曉天依舊一輪紅、

八識の暗窟を打破して、大光明の働き、之を靈機と云ふ、人々不言の當

体、言語道断の端的、有だの無だの、是だの非だの、善だの悪だの、うんな相躰偶待の中に、うるついでには居らぬ、世間相躰の姿は、一切虚妄不實じや、此機靈は迥然獨脱しや、併し二元論的に考へては困るぞ、見色聞聲八識の中に居ては、役に立ぬ、よろしく其上を坐断して、目はじきを聞きて、人を利益すべしぞ、豈用、雙は、本韻を押し返し作つたぞ、雙を用ぬのみでない、旨をも用ぬじや、うんなら如何にと曰ふに、よんべ金鳥(日輪)は西の海に沈んだ、うして今朝は又いつものやうに、東の山のはより、一輪さしり上つた、毎日く日は東の方より出で、毎日く月は西の方に没するぞ、是れ何たる不可思議じや、更に換言すれば、昨夜大根飯を六杯食たが、今夜麥飯を八杯食ふと云ふやうなもの、白隠和尚はこの三四の句を互に轉じて、昨夜金鳥一輪紅、曉天依、舊飛入、海と云はれた、是亦什麼の道理ぞ

又

用盡機關、費盡功、惺惺底、事不如、聲、艸鞋根断、來時路、百鳥不啼、花亂紅、

無相無爲の本分を、識得した處から云へは、何のかのど、からくりを用ゐたり、工夫を費したり、するに及ばぬ、なにはを惺惺として、利根にはたらいても、埒はあかぬ、畢竟黙して愚の如く魯の如く、ならんには如かず、今までは彼此と苦勞して、草鞋がけで諸處方々を往來したが、今はどんと來時の路をも忘却して、十年不得歸になつた、百鳥不啼、花亂紅は鐘山詩に、一鳥不啼山更幽とあると同じ勢じや、人跡不到の處、鳥さへも啼かぬと云ふ、花は誰のために亂れ咲いてをるのであるぞ、例の和歌二つは、

法の道あどなきもとの山なれば(洞家却)まつは縁に花は白露(大ひま)
(打今時に)
(出て出る)
 染ねどもやまはみどりになりけりをのがいろく花もなき也

(此句ても立歸る)



入塵垂手序十
柴門獨掩、千聖不知、埋自己之風光、負前賢之途轍、提瓢入市、策杖

還家酒肆魚行、化令成佛

是位が佛法脩行の大綱とも云ふべきじや、元來菩薩の學道の目的は、無量無邊の衆生をして、悉く濟度してやらふと云ふにあるからして、單に自利だけでは満足と云はれぬ、上求菩提と共に、下化衆生と出かけねばならぬ、山林にのみ隱居して居ては、佛法の活面目が現はれぬ、市鄣の中に入り込んで、衆生濟度のために、慈悲の手をたれねばならぬ、佛心は慈悲これなりとある如く、至大至剛の慈悲がなくては、かなはぬぞ、脩行者は能く此に目を着けてもらひたい、禪者が雨點の棒を行じ、奔雷の喝を下すも、皆一片至誠の泉から、涌き出づるのであるほどに、ゆめ／＼輕心慢心を生ずべきでない、前置は是までにして、さて柴門獨掩とあるが、柴門とは何ものを指したのじや、この柴門はどこにあるのじや、大智禪師の偈に、截斷人間、是非白雲深處掩柴扉とあるが、八識田中一刀を下した處では、佛祖も望むて見ることが出来ぬ、

要津を把定して凡聖を通せずじや、向上向下もかまわぬ、地獄天堂も
 つら出しはならぬ自己之風光を埋没すとは、己靈をも重んぜずの義
 ぞ、氏も係圖も善も悪も男も女も、一切色相同時に打失するぞ、それの
 みか前賢の途轍にも、孤負するを敢てするじや、佛もかまわす、祖師も
 かまはず、機に臨み變に應じて、自由の働きをなすぞ、瓢を提げて市に
 入るとは、今の坊主のやうに、酒色に沈溺するのではない、是は菩薩が
 衆生を濟度せんとして、灰頭土面で塵欲界中に、大立廻りをやる様子を
 述べた、併し菩薩は、世間の、きつたはたしたと云ふ、紛擾の境に在りて
 も、少しもうれに染むことはないぞ、杖を策て家に還るの境涯、形にば
 かりついでまはつては、毫釐千里を誤る、家舎に在りて途中を離れず、
 道場を立せずして威儀を現す、三昧の力量、遂に此に至らねばならぬ、
 たゞ大言壯語するばかりで、それが禪宗だど心得たら、地獄に入るこ
 と、箭よりも急じや、どふしても苦心に苦心を重ねて、千銀百鍊した上

でなくては、脱洒自在の生涯は夢にも見られぬ、學問は智慧を進むる
 ばかりぞ、徳を涵養せんとは、是非別に工夫がなくてはならぬ、世間
 には哲學とか何とか云ひて、わからぬ理屈を述べゑるものもあるが、
 ろれもよからう、併し其胸中は如何と云ふに、名聞利欲のかたまり、實に
 ひさしくしいぞ、禪は決してそんな口耳の學問をとらぬ、そはどに角、
 脩行の頂上に至れば、今述べた如くじやが、そうなるぞ酒肆魚行、悉皆
 成佛して、大光明を放つやうになる、只かの柴門の力で、有情非情同時
 成佛じや、さはいへ成佛とはいなものをぞ、

頌曰

露胸跣足入塵來、抹土塗灰笑滿腮、不用神仙真秘訣、直教枯木放

花開、

胸を露し足を跣にす、吾實に爾に藏くすことなしぞ、赤はだかのまゝ、
 で、塵に入りて爲人度生する、土にまみれ灰をかうむるも、いとばぬ、な

んでもかんでも、手にまかせて拵じ来れば、着々親しじや、頭々上に明かに、物々上に現じてをる、是實に不起道場現威儀なり、併し此三昧の力、知音がない、笑ふより外はないか、三四の句、神仙真秘訣を用ゐずしてとは、此方では別に仙人の鍊丹の法、咒術の法など云ふ、奇妙不思議を現する必要はないのである、そんなものがなくても、枯木をして、直に百花爛熳の春とならしめるは、却て此方の法が不思議ではないか、唯に之れのみでない、百千萬無量の法門は皆此より涌き出づるは、唯に、佛法はありがたいものぞ、

和

者漢親、從異類來、分明馬領、與驢顯、一揮鐵棒、疾如風、萬戶千門盡、豁開、

者漢とはこの奴の義、事物紀原に、今の俗人を罵つて漢と曰ふは、蓋し晋の末に胡が中原を亂したる故、胡人は中國を罵つて漢と云へり、南

人が北人を罵つて胡となし、虜となすが如し、とある、蓋し罵るは却て親しきを示すぞ、さてこの奴は何處から来たかと云ふに、親しく異類、即ち佛にもあらず、天堂にもあらず、魔境界より来たのじや、それで馬領だの驢顯だのと、大に他に類せぬ所がある、併し是はおぼけでもない、なんでもない、其形を問ふまいぞ、併し亦佛でもない、祖師でもない、到底變なものである、只其變なものだから、時に臨んで自由自在に變化する、觀音に三十二應身あると云ふが、なんの三十二どころではない、千万無量じや、そして其勢の疾きことは、宛然擊石火閃電光、一本の鐵棒を七縱八横にふりまわして、當るを幸に斬つてまわる、中々觸るゝことも出来ぬぞ、千門萬戸を打破するのみにあらずじや、佛界も魔界も地獄の底までも、粉なみぢんに擊碎する、誠に凄しい、なせなれば者、漢は一念不生前後際断の處、諸佛聚會の處を、一槌に打破したる魔境界より、現はれ出でたからであるぞ、此の如く接物利生到らざる

所なければ、自己の機鋒は清風凜々、少しも汚濁には染まぬ、併し是は只勢のよいことを云つたのではないぞ、佛が自分の悟りより出で、下界の衆生と一處に、波を揚げ塵を同じうしながら、之を教はんとする様子を述べたのじや、此境界にならねば、分明ならぬぞ、

又

袖裡金槌劈面來、胡言漢語笑盈顛、相逢若解不相識、樓閣門庭八字開、

この詩を古人が評して、作者は佛に入れども魔に入らざる所があるぞ云ふた、そは兎に角、衲僧家は皆袖裡に一の金槌をかくしてをるが、機に當つては驚向にふりまはすぞ、其の振り舞はす上に於ては、塗轍に拘はらぬ、野卑な胡言も風流な漢語も、上手に用ゆれば、皆第一義に販するぞ、此境界になりては、頭々物々皆笑ひ顛に満つて、大屋も隠居も總べて大歡喜地じや、併し乍ら、雜とやつて取りちがひをせまい、轉

句に相逢、不相識とある、此を會得せねば、だめしや、兩鏡相對、於中無影像と、古人か云ふたも、この當体しや、身心脱落と云ふも、このじや、男も女も、男でもない、女でもない、はて奇妙しやないか、遂に結句に樓閣門庭八字開と截て放した、此樓閣門の事は、華嚴經の七十七入法界品に斯ふある、此南方に於て園あり、海岸と名く、園あり、大莊嚴と名く、其中に一の廣大の樓閣あり、毘盧舍那莊嚴と名く、菩薩の善根果報より生し、菩薩の念力願力自在力神通力より生す、乃至彌勒菩薩摩訶薩、其中に安處す云々、さて今謂ふ樓閣とは、全く佛智莊嚴の義を表したのじや、始め善財童子か、五十餘城を經過して、最後に此樓閣に到つた處が、門關が閉鎖して居て容易に開かぬ、遂に才かに彌勒の一彈指で、忽ち豁開された、是は又だふじや、其れは華嚴經の古物語じやと云ふて、打捨て、置くまいぞ、善財童子とは、即今目前歷々聽法底の人々である、五十餘城とは、教家の所謂十信、十住、十行、十回向、十地、の脩行の路程

じや、又は吾門の法身、機關、言詮、難透難解、向上、等と見ても善い、此彌勒
 の樓閣こそ、等覺妙覺の果滿で、即ち佛の境界じや、吾宗ては五位、十重
 禁の調へが濟むで、最後の牢關まで届ひた處である、祖師門下の修行
 も、こゝまで盡さねば、人天衆前で大口は開かれぬ、是て先づ大畧十牛
 圖の講釋は濟んたが、肝要の宗旨は、決して講說の上斗りでは、いかぬ、
 此事は眞參實證の力で仕て取れ、鵝林の所謂釋迦彌陀も今に修行最
 中である程に、衆中もし飽參の上士あらば、定て山僧か憐子不知醜の
 痴態笑ふであらふ、何故そ日下挑孤灯

手はたれて(途中)あしはそらなる(家舍)おこと山かれたる枝に鳥や
 すむらん(八識田ヲ破タ處ニ居ラハ)
 身をおもふ身をはこゝそくるしむるあるにまかせて有そあるへ



提唱十牛圖竟

明治廿九年十一月廿七日印刷

明治廿九年十一月廿三日發行



著者

釋

宗演

神奈川縣鎌倉郡小阪村

發行者

棧

寶順

東京市淺草區吉野町十三番地

印刷者

行

川敬三

東京市淺草區八幡町十一番地

發行所

經

世書院

東京市淺草區吉野町十三番地

◎經世書院發賣書

御注意

御注文は必ず前金御送付の事、御送金無之ては一切送品不致候事、爲替振込は遠草局郵券代用は可成書體形にて一割増の事

今北洪川禪師俗解
釋宗演禪師和註

○訂正坐禪論和解 ○定價金拾錢
○郵税金貳錢

近來、禪學の流行を奇とし一夜作りの禪書、世に行はるゝに至る、之れ斯學の爲め大に憂ふべきなり、抑も本書は、建長開祖大覺禪師の「坐禪論」てよ珍貴に、前圓覺管長洪川禪師俗解を施され、現管長宗演禪師和註を付せられたるものにして文章平易、旨趣簡明、見性成佛の法門、直指人心の妙旨、説き得て餘蘊なし、實に本書は、禪學初入者にあつては無比の好指針なり。魔力を養成せんと欲する人、大悟徹底の妙境に懸はんと欲する人は、須らく本書を熟讀せらるべし。

◎再達磨禪經說通考疏 ◎全大本六冊
◎定價壹圓五拾錢、郵稅參拾四錢

本疏は、白隱會下に其人ありと知られたる學識卓絶、道徳拔群たりし東嶽大禪師の著にして、達磨禪經が禪學者を裨益するべき妙なきらざるを知り、師が該博なる學識と見性の慧眼とを以て、懇切丁寧に之が註解を試みられたるものなり、されば一たび本疏の出づるや、當時の學者、就ふて之を購ひ以て直指單傳の好標準、見性成佛の眞師友とせり、然らば幾干ならずして、一朝醍醐の災に罹り、瓜版灰燼に委し去り、坊間久しく本書を絶ち、學者亦此の好疏あるを知る者稀なり此に足利惠倫、土岐大觀等の諸師、深く本疏の世に傳はらざるを慨し、再刻の大業を企畫せられ、本院之れが對本調進等を托せらるゝ而して今や刻期其の効を奏せり、乞ふ護法の僧伽、愛理の志士、來りて本書を讀み、以て佛心の奥妙を究めたまへ。

因に白す、禪學者の六經三略とも云ふべきの書、古來、禪關筆述、禪門寶訓、いつまで草等、其種類尠なりとせず、然れども着眼の慧敏なる、注意の周到なる、本書の右に右つるもの、益しあらざるべし。

文學士園田宗惠君著

●聖德太子

正價 廿五錢 郵税 四錢

本書は(一)傳記の撰採、(二)太子以前の日本、(三)太子の幼時及び性質、(四)太子の幼穉、(五)太子の著作、(六)太子の感化力、(七)太子の眞相、の七章に分てり
本書一出、世間幾百の新開雜誌は何れも讚揚の辭を以て之を迎へたり、之れ其の議論の公平なる、其の考證の正確なる、其の文章の流麗なるに由らすんばあらず

●戦後佛教革新策

定價 十五錢 郵税 二錢

本書は上下二巻に分ち、戦勝後に於ける佛教徒の心得及將來布教の方針を付、懇切に論明したるもの也、而して上巻は戦後の日本、日本の佛教、佛教の將來、の三段に分ちて之を論じ、下巻は日本佛教腐敗の原因及其現況、世界に於ける佛教徒、日本に於ける佛教徒、如何にして新紀元を開くべき乎、の數章に分ちて、手細に之を論じたり、而して行文は流麗に、議論は痛快なり、苟く將來佛教の運命を思ふものは、必ず一讀すべしものなり

黒田真洞師著

●大佛敎大意

正價 拾錢 郵税 二錢

右は佛無來國チカゴ宗教大會開設に際し、英譯して施本せし原書(和文)なり

小泉了諦師著

●佛門警鐘

正價 八錢 郵税 二錢

行は曾て印度及び土耳其古等に渡航せられし小泉了諦氏が、近時の僧風に懐す、所ありて著作せられたるものなり、其の精言の第一、言く「本書は佛門警鐘と曰ふ所以のものは、頑眠の僧侶を覺せんと欲するの意に成れる書なればなり」と以て本書が如何なるを後するの一斑を知るを得べし

●佛敎傳通史

定價 金拾五錢 郵税 金二錢

本書は佛敎が印度に起りしより支那朝鮮日本に傳來せし次第を極めて簡明に記述し且篇中處々に高僧、碩學の逸話など加へられたるものにして、頗る有益の書なり

雲照律師著

●佛敎大原則

定價 拾錢 郵税 貳錢

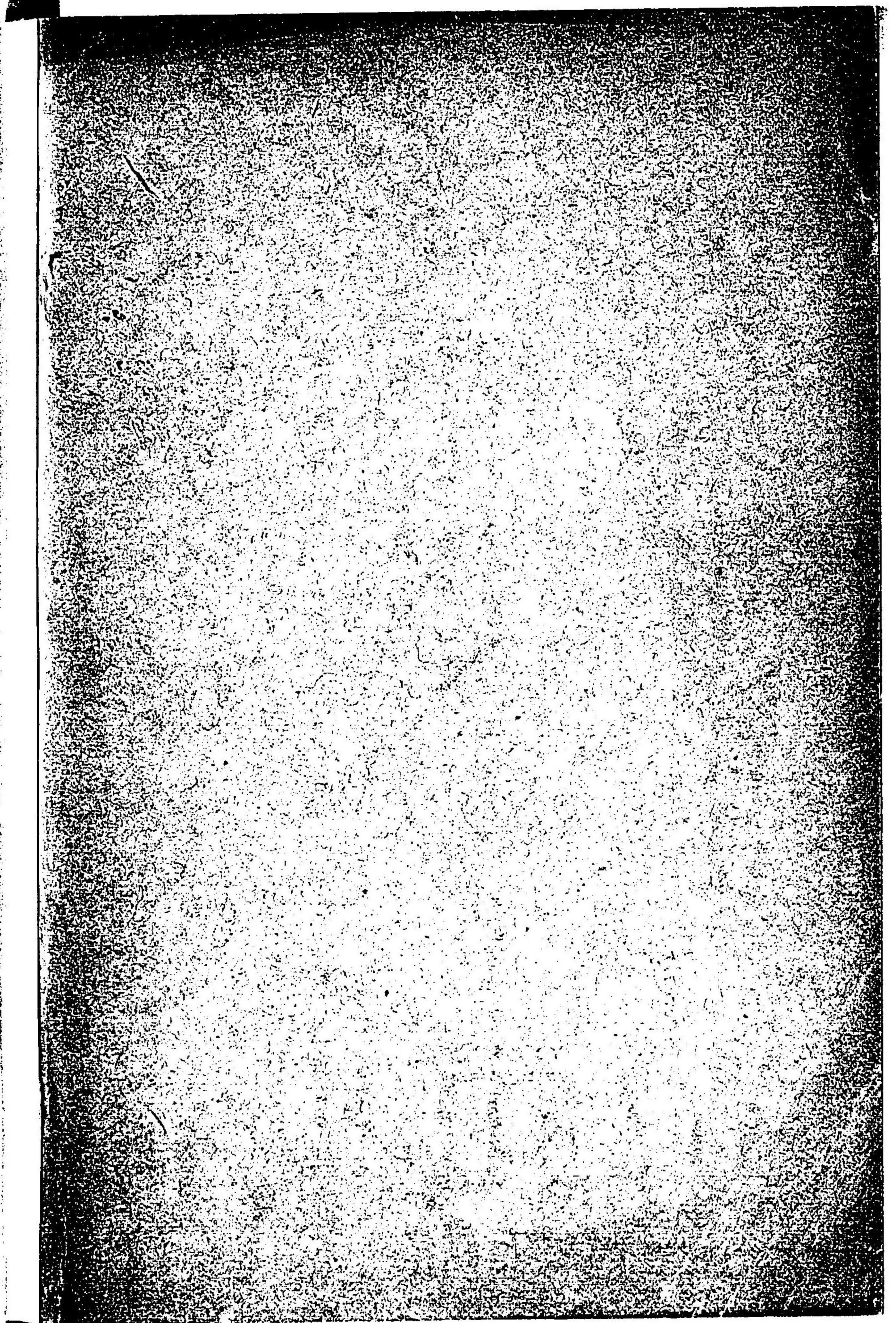
右は某文學士の需めに應じて和上が極めて平易簡短に佛敎の大原理を開示せられたる近來の名著也

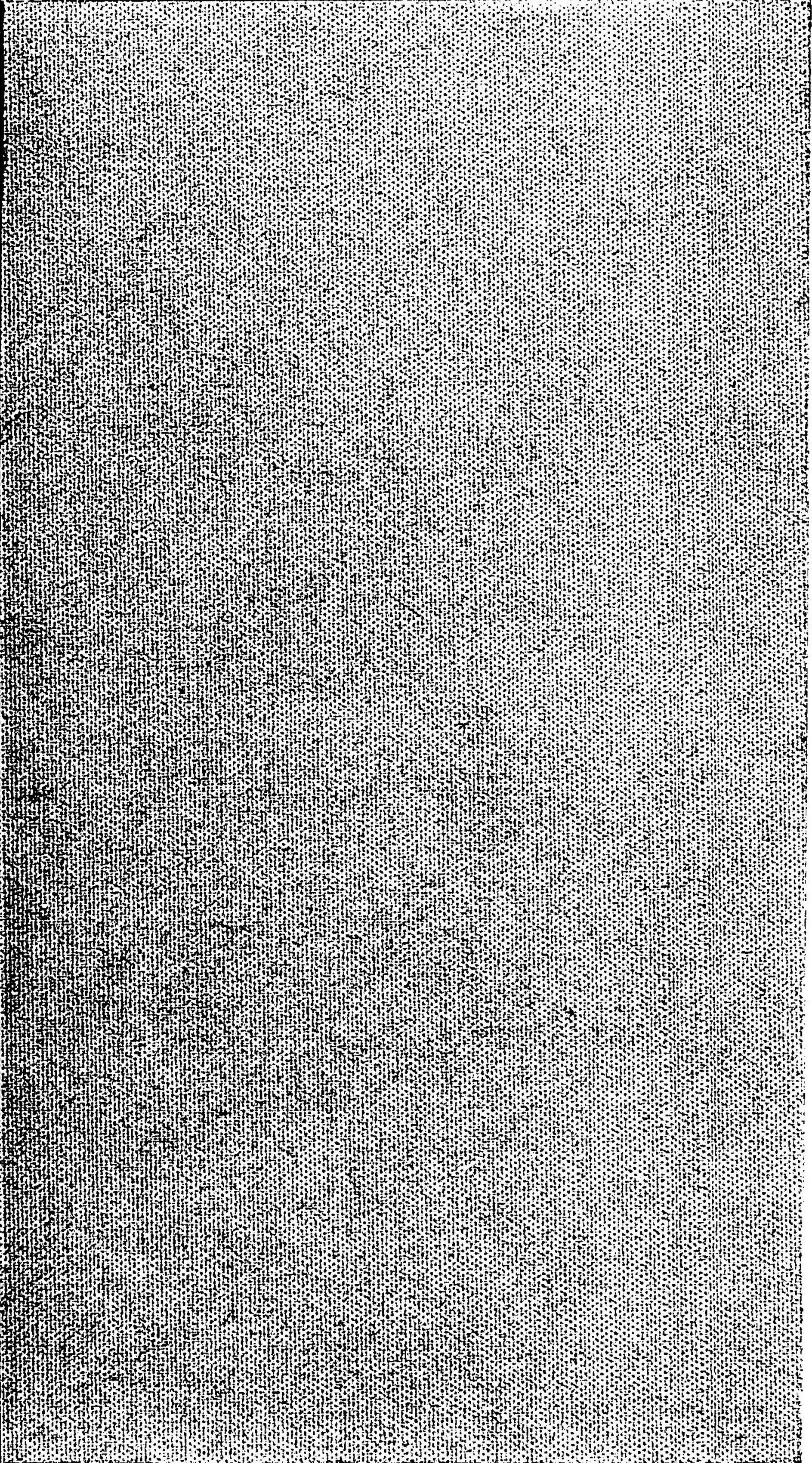
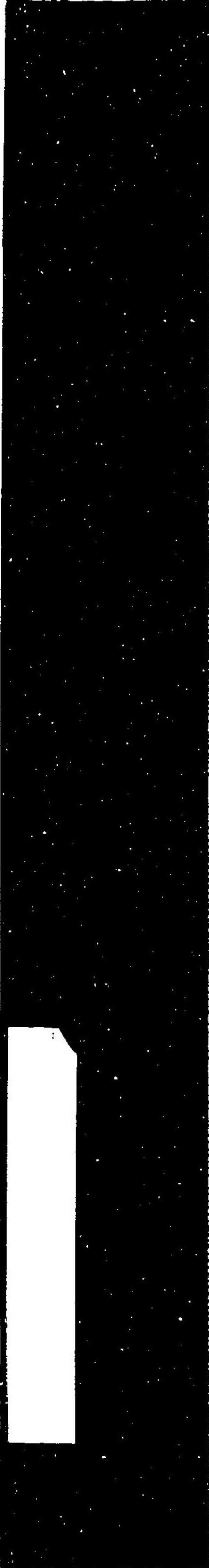
高木竹濤校訂

●因明論俗詮

定價 拾貳錢 郵税 貳錢

通俗に入正理論の正意を辨したるもの、本書の右に出づるものなし、斯學に志すの士乞ふ購讀せられよ





特21

910

提唱十牛圖

国立国会図書館

019742-000-3

特21-910

提唱十牛圖

宗演/著

M29.11

ABG-0547

